

第3部

寄稿 教育・研究・診療のあゆみ

1

歴代学長

2

名誉教授

3

元事務局長／前看護部長

協定校からのメッセージ

学生今昔

我が母校の創立150周年を祝って

佐野 豊

〈1973.4~1979.3, 1982.4~1988.3〉

1 はじめに

創立150年記念誌の発刊に当たり、紙面を借りて、我が国の医療の発展に貢献し、母校の輝かしい伝統を築いてくださった数多くの同窓各位に感謝し、併せて京都府立医科大学の益々の充実と発展を心から祈念いたします。私も96歳まで生き永らえたお陰で、本学の100周年・125周年・135周年記念誌に寄稿させていただき、またこの度150周年記念誌の寄稿も依頼いただきましたことを、大変光栄に思います。

この機会に、私自身と京都府立医科大学との関わりについて、思い出を記したいと思います。

2 学生—教授時代

私は太平洋戦争中に日本医科大学に入学し、1945(昭和20)年8月15日の敗戦の日を山形県鶴岡市で迎えました。戦後の混乱のため東京を離れ、実家のある神戸に帰っていた私は、1946(昭和21)年秋に兄である勇の勧めもあり、京都府立医科大学の転入試験を受け、1947(昭和22)年春から本学の学生になりました。学生時代から解剖学教室に出入りし、島田吉三郎名誉教授の指導を受け、終神経の研究に没頭しました。1948(昭和23)年には第53回日本解剖学会総会で発表させていただき、その研究内容は創刊されたばかりの「生体の科学」1巻3号に掲載されました。卒業後、1年間のインターンの後、1951(昭和26)年野田秀俊教授主宰の第一解剖学教室に助手として入り、視床下部の神経分泌の研究を行いました。1954(昭和29)年独文で論文を2編書きました。一つは学位論文になった下垂体の格子線維の論文で、もう一つは鳥の腰髄の神経分泌に関する論文です。それらは、Folia.



Anat. Jap. に掲載されました。その論文がきっかけでドイツの Kiel 大学 W.Bargmann 教授との文通が始まりました。1954(昭和29)年6月に学位を取り、7月から弱冠28歳で教壇に立ちました(写真1)。1957(昭和32)年3月15日神戸港からドイツの貨客船に乗って留学に向かいました。途中スエズ運河が閉鎖されたため、喜望峰経由で2ヶ月以上の航海ののちにハンブルグ港に到着しました。その期間、日本人が私一人という環境のお陰で、ドイツ語を習得することができました。ドイツでは W.Bargmann 教授の下、充実した研究生活を送りました。研究のテーマは分泌物が Golgi 装置で、可視的顆粒になること、それらが確実に神経線維の中を流れることを電子顕微鏡的に確認することでした。1958(昭和33)年暮れに帰国しました。1960(昭和35)年11月に野田教授が53歳の若さで回盲癌の腹膜転移により亡くなりました。当時、私はまだ教育歴が8年しかなく、教授の資格がありませんでした。教授に選ばれたのは、1961(昭和36)年6月のことでした。当時、私は魚類の神経分泌の研究に熱中し、私が研究した魚は、17目、104科、208種に及び、それらの脊髄についての業績で、1962(昭和37)年京都大学から理学博士の学位を贈られました。その後、カテコラミンの研究、セロトニンの研究などを行い、我が教室出

身の多くの解剖学教授(藤田尚男広島大学医学部教授・大阪大学医学部教授、大塚長康岡山大学医学部教授、越智淳三滋賀医科大学教授、井端泰彦本学教授、野条良彰福井医科大学教授、松浦忠夫明治鍼灸大学教授、河田光博本学教授、山田久夫関西医科大学教授、上田秀一獨協医科大学教授、小澤一史日本医科大学教授、由利和也高知大学医学部教授、西真弓奈良県立医科大学教授)を輩出することができたことは私のこの上なき喜びであります。

残念なことは、学生部長時代に起こった学園紛争です。26名の教授が約100時間、記念講堂に監禁され団交を受けました。4日後、本学にも機動隊が入りようやく解放されました。学生部長であった私は学生との頻回の話し合いを行い、身体的にも精神的にも疲弊したことを今でも記憶しています(写真2)。

教授時代には「レコードコンサート」と名付け、毎週土曜日に本学学生たちを銀閣寺の自宅に招き、家内の手料理でお酒を酌み交わしながら、収集した数多くのレコードを聴き、音楽談義を繰り広げたものでした。また、ラグビー部の創設時から顧問を務め、学生たちと深い交流を重ねられたことは、非常に楽しい思い出です。囲碁、将棋も趣味としておりましたため、学生や教員との交流に非常に役立ったことと思います。

3 学長時代

私は、1973～1979(昭和48～54)年、1982～1988(昭和57～63)年の4期12年間学長を務めました。学長として、大学の様々な整備拡大計画が、京都府の蜷川虎三知事、林田由紀夫知事、野中広務副知事、荒巻禎一副知事とともに完成できたことは望外の喜びでした。年月の経過により新鮮味は薄れているかとは思いますが、現有の基礎医学校舎、本学附属病院、本学図書館、本学看護学舎は私が学長時代に竣工した建物です。今でも通るたびにその頃の京都府との交渉が脳裏に蘇ります。当時の話は京都府立医科大学創立125周年記念誌(p4～8)に記載しておりますので興味のある方はお読みください。

2期目の学長を終えた後、約3ヶ月間ドイツのWurzburg大学の客員教授になり、単身で渡独しました。文献を読み、研究者に接し、新しい知識を注入でき、そのおかげで再び研究者としての活力が蘇りました。国際交流にも力を入れました。1986(昭和61)年6月26日教育及び学術的協力をする目的でオクラホマ大学と姉妹校の協定を結びました。オクラホマ大学での調印式には教授会で選ばれた英語が堪能な第一内科近藤元治教授と泌尿器科学の渡辺決教授を伴って参りました(写真3)。現在では、海外の20大学との国際交流が行われていることを嬉しく思います。

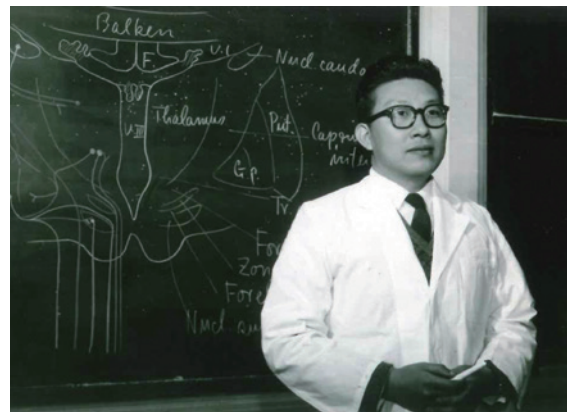


写真1 助教授時代の講義風景



写真2 本学への機動隊突入時



写真3 オクラホマ大学学長室での調印式

研究分野に関しては、当時手薄であった科研費に関しても大学として全力で取り組んでいただくよう指導しました。現在に至るまで本学が医学の発展に貢献し続けていることは誇らしい限りです。

4 定年後

定年後は医療に関わる職のみでなく、教育や音楽など幅広い職種を経験させていただく機会に恵まれました。そのどれもが充実した日々でしたが、中でも京都市芸術財団に関わり京都コンサートホールに頻繁に通った日々は強く心に残っております。

時間が出来ましたのでライフワークである神経解剖学の勉強を深めて、神経科学の1巻1000ページの著書(医学書院・金芳堂)を4巻書き上げました。

今は、息子夫婦や孫家族と食事をするのが一番の喜びです(写真4)。



写真4 家族に囲まれて(2020年1月1日)

5 おわりに

最後に、京都府立医科大学のさらなるご発展と、世界の医学を担う医師が本学から輩出されることを心より願います。

維新と日本近代医学のあけぼの

藤田哲也

(1938.4~1994.3)

1 西洋医学教育の衝撃波を生んだ戊辰の役

慶応4年(西暦1868年、旧暦では戊辰の年=明治元年、つまり今から154年前の)正月3日、鳥羽・伏見の銃撃戦で始まった戊辰戦争で、それまで日本人が経験したこともない多数の銃砲による傷病兵が発生した。まず、彼らが担ぎこまれたのは、現在同志社大学の建っている所にあった薩摩藩の上屋敷と藩邸(薩州屋舗、図1)の真裏にある相国寺養源院だったが、日本古来の漢方の名医が集められても、なすすべを知らず、呻吟する傷病兵を前に焦燥感が募るばかりであった。

薩州屋舗と相国寺養源院には藩主島津忠義をはじめ、西郷隆盛、大山 巖などがいて、熱心に打開策を考えていたが、この状況の打破には西洋医学の力を借りる他はない、との結論に達した。幸い、神戸のイギリス大使館から大使館付医官のウィリアム・ウイリスを派遣してもらうことができた。彼は目の前にいながらどうしようもなかった重症の患者を、神戸を出発する直前にロンドンから届いたばかりのヨンケルの最



新式クロロフォルム麻酔装置(Inhalator、図2)を使い、麻酔をかけ、重傷を負った腕や足を切断したり、めり込んだ異物や骨の断片を掘り出して傷を縫い合わせ、鉄製の副木をあてたりする鮮やかな外科的処置を行った。

10日ほどの滞在の間にも小手術は別として、「手足の切断など様々な大規模な手術も14種類に及んだ」という。この寺の本堂を借りた臨時野戦病院で、大手術だけでも1日平均1~2回も行ったわけである。まさに、大車輪の活躍であった。彼が「最新のクロロフォルム麻酔を使ったので、手術の痛みはなく、患者や日本人の医者の感謝はたいへんなものだった」と言っている



図1 慶応元年の京都



図2 ヨンケルの麻酔装置

のは、間違いなく彼の満足感をも表している。彼自身にとっても、最新の麻酔装置の使い心地は格別のものであったはずだ。また、このやり方を教えられて、初めて麻酔をかける日本の医師も、ヨンケルの装置を使わせてもらえば、安全かつ容易に適切な麻酔が次々と実施できたことに間違いはない。おそらく、ウイルス自身も、素人に近い助手の助けを借りるだけで、かくまで容易に患者を無痛状態にし、落ち着いてゆっくり手術をするというようなことは初めての経験であったろう。ヨンケルの麻酔装置とクロロフォルムのおかげで、大手術に、安心して専念できたに違いないのだ。

一方、日本人の側からすると、直前まで呻吟し悲鳴をあげていた患者が一遍に静かになって手術を受けるというようなことを、目の前でデモンストレーションをされたわけである。それを見た官軍方の各藩の要人や、伝統的な日本の医学しか知らない医師たち(中には自称蘭方医もいた)が受けた衝撃は、本当に大きなものであった。彼らにとって、西洋医学は、正に「神偉なる」神の業と見えた。この中に将来京都府の医療行政をリードする明石博高^{ひろあきら}、慈恵会医学校と日本最長の歴史を誇る慈恵会看護学校を設立した高木兼寛、大阪医学校(後の大阪大学)の設立に力をつくした高橋正純などがいて、彼らが各地で西洋医学の導入に奔走した。

またウイルスは、薩摩藩の信頼を集め、まず大学東校(現在の東京大学医学部)附属の「大病院」の初代院長となり、次の年(明治2年)政府の方針に従い、鹿児島医学校校長に転出した。改革の衝撃波は、このように前例を見ない速さで全国に波及し、鹿児島から東京まで日本の医学・医療を、あれよあれよという間に一変させる結果となった。

2 本学で創案され全国に普及した「カルテ」の制度と赤十字

1872(明治5)年、本学創立と共にライブチツヒ大学医学部教授会から正式の推薦をうけて

赴任してきたヴィーン生まれの医師ヨンケル・フォン・ランゲックは、この時、44歳の経験をつんだドイツ系外科医で、産科・婦人科専門医の資格も持っていた。京都に着任してただちに(明治5年)、女性7名を含む医学生の教育を開始した。ただこの頃は、女医という資格は一切認められていない時代であったから、これは助産婦のための勉強をする女性であったかもしれない。彼は日本から帰還して後も暫くは、ロンドンの有名なサマリタン産婦人科病院で麻酔医としての活躍を続けていた。

彼の在京期間は僅か3年半しかなかったが、日本文化を幅広くかつ深く研究し、帰国後、立派なJapanologieの著書2冊¹⁾をライブチツヒから出版し、ヨーロッパで注目を集めた文化人でもあった。この2冊の著書は、当時、日本紹介の名著として有名になった。

ヨンケルが京都を中心に残した業績は色々あるが、本学の創立に参画したこと以外で、今に及ぶ影響を大きく残しているのは、日本に初めて導入することになった「カルテ」と「赤十字のマーク」であろう。

そこで、まず「カルテ」の制度についてヨンケルの寄与から見てみよう。

最近「カルテ」の制度の歴史を詳しく調べた人が何人かいて、結論的にドイツを含め世界中で病歴記録のことを「カルテ」と称している国はどこにもなく、日本に特異な地方的習慣であると断じておられるのを知った。それもそのはずであって、「カルテ」は本学が明治5年に京都療病院医学校として創立されたとき、ヨンケルが定め、それが広がってきた制度なので諸外国にないのは当然なのである。

それは、本学創設の時(明治5年=壬申)10月に出された療病院治療条則(図3)に、『先ず当直医師は「カルテ」用紙に来院患者の氏名年齢住所職業病症などを記入し、患者にもたせ診察・料金支払い・投薬・入院のさいに提出させ、その一切の処置を記入する。』という記載が最初のものなのだ。この本学発の創意工夫が日本全国に発信され150年を経て定着した結果が、現在の「カルテ」の来歴なのである。

一方、赤十字のマークは、本学創立時点で京都府の正式認可を受け、引き続き付属病院(=療病院)のシンボルマークとして使われた。療病院は長い間、日本で最初のそして唯一の赤十字病院であったのだ。100年以上もたってから、その実用例が考古学的証拠として発見された。それをお目かけよう。

私が教授に任命され学生部長に指名されて間もなく、大学紛争直後に取り壊されることになった旧館病棟の廊下を巡回していると、片隅に積み上げられたゴミの中から、赤十字マークが浮き彫りにされ、「療病院」というサインも入った使い古したランタンが、燃えさしのローソクが入ったまま、2つ出てきた。私は捨てられる運命にあったこのランタンを拾って、図書館2階にある資料室に取めておいた。興味のある方にはぜひご覧になっていただきたいと思っている(図4)。

ヨンケルが本学創設の最初の外国人教師とし



図5 ヨンケル(Ferdinand Edalbert Junker von Langeegg) 44歳

て来日したのは1872(明治5)年であった(図5)。彼は1828年にウィーンで生まれ、ウィーン大学で5年間学び哲学、ついで法学の学位を取った後、医学部に入り、5年後、1853年に医学部を卒業している。

この1853年というのは、トルコとロシアがクリミアの領有権をめぐる争ったクリミア戦争が始まった年である。イギリスの参戦は1年後(1854年)で、ナイチンゲールが従軍看護婦を率いてトルコのスクタリの軍病院に行ったのも、この年であった。この戦争では、エーテル麻酔が使用できるようになり、今まで手術できなかった重篤な外傷が治療の対象になった。ただ、手術傷の消毒や手術用具・手術者の無菌化など、その概念すらまだない時代である。大手術が容易になればなるだけ、術後感染症が増加し、敗血症で死亡する者が激増した。1870年以降になり、パストールの指摘によって、微生物による感染症の重要性が気づかれ、石炭酸消毒が実施されるまで、血と膿と腐敗臭にまみれた野戦病院における大手術後の予後は、絶対不良と言えるものであった。

このような時代に、ヨンケルは卒業し、卒後2年間、ウィーンでさらに研修を続け、内科、外科、産科、眼科の専門医の資格をとった。

しかし、1859年には、イタリアはトリエステやヴェネツィアなど旧領を奪回するためにフランスと同盟を組んでオーストリアに宣戦を布告し、イタリア統一戦争を開始した。このとき、ヨンケルも祖国オーストリアを防衛するた

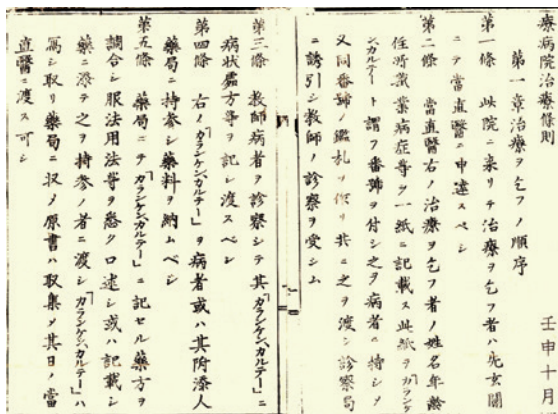


図3 療病院治療条則



図4 療病院で使用されていたランタンと明治8年頃の京都府医師免許銀メダル

め志願し、1859年6月1日付の辞令をもらい、北イタリアのソルフェリーノに近いトレヴィゾ (Treviso) の陸軍病院に軍医中尉として着任している。ここはロンバルディア平野の北端で、ミラノからソルフェリーノの野を経てトリエステにいたる街道の要衝にあった。

3

ソルフェリーノの戦いが ヨンケルに与えたもの

誰も予想できなかった時と場所で、オーストリア軍とイタリア・フランス連合軍が遭遇し、有名なソルフェリーノの戦いが突如として6月24日に勃発した。両軍とも、合戦場はもっと先にあると思いつながら進軍していたのに、夜が明けると、敵軍が直ぐ目の前にいたのだ。戦略をたてる間もなく、オーストリア側が17万人、フランス・イタリア連合軍が15万人の兵士というように、膨大な数の軍勢がソルフェリーノで激突したのである。歴史に残る大激戦・大乱戦になった。この戦闘は、かつて使われたことのない高度な性能をもつ兵器の撃ち合いになったことでも有名である。両軍とも500門に近い大砲を揃えていたが、特にフランス軍は、最新式の、軸の中にねじを切った、命中率も殺傷効果も高いライフル・カノンという大砲を投入していた。弾丸は着弾とともに強烈な爆薬で炸裂するようになっていた。最後に猛烈な風雨の嵐になり火薬が使えなくなった後の肉弾戦もすさまじく、莫大な数の兵士が重傷を受けたり、死んだりする結果となった。

このとき、敗走したオーストリア軍の側だけでも2万5千人ほどの重症者が出て、そのうちの5千人ぐらいは死んだとされている。戊辰戦争では、鳥羽・伏見の戦いで、ウイリスの報告によれば、100人余りの薩摩兵が重症になり62人が死んだと伝えられているが、何とソルフェリーノでは数万人とか数千人というような、莫大な数の人が重傷を負い死んでいったのだ。この戦闘は午前6時頃に始まり15時間続いたとされている。いまだかつてなかった、銃砲による

大規模な殺戮戦になったのである。

このソルフェリーノの戦いに、オーストリア側の軍医としてヨンケルが参加していたわけである。この惨状を目撃・体験して恐怖に駆られたのは、その時にオーストリア軍を指揮していたオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世も同じであった。彼は心底、恐怖したし、フランス軍を指揮していたナポレオン3世も同じくこの結果の悲惨さに仰天して、直ちに講和の話し合いを始めたと伝えられている。

ちょうどタイミングよくそこへ、アンリ・デュナンが、敵味方を問わず、お互いに傷病者を攻撃するようなことはやめようではないかという提案をして、ジュネーブ条約が成立し、1863年に17ヶ国が批准した結果、万国赤十字というのができた。一方、ヨンケルはヨンケルで直ちに「何とか軍務をやめさせて欲しい」ということを、軍司令部に申し出ている。

この辺の事情は、眼科医でもあり医学歴史家でもある奥沢康正先生が現地へ行って何遍もオーストリアやプロシアの記録を調べられ、初めて詳しくわかってきた¹⁾。例えば、1859年6月1日に、ヨンケルがトレヴィゾへの派遣辞令をもらって着任した事実とか、間もなくそこからヴィーンへ逃げて帰ってきて「最近ひどく健康を害していますので、より有利な民間への再就職を希望します。」というような退役願いを、1860年6月9日に司令部あてに出している文書を発見しておられる。先生は、この軍務がヨンケルにとって、劇的な心境の変化を来した時期であったことを明らかにされた。彼の心境が一変した理由は、悲惨なソルフェリーノの殺戮戦に軍医として巻き込まれたという事実を考えれば、よく理解できる。

そして、産婦人科医としてイギリス外科学会ロイヤル・ソサイエティの会員になり、Samaritan Free Hospital for Women に勤務し、この間に、前にも説明したような、ヨンケルの麻酔装置を発明したのである。彼は、非常に繊細な神経の持ち主であったように思われる。ソルフェリーノの戦いを経験した後、産婦人科で手術や分娩の際に麻酔をかけたり、研究したりはしたが、戦陣外科的

な手術や、壊疽や複雑骨折などで必要になる四肢の切断など大がかりで観血的な手術は、それが必要と思われる時でも、退役後は、一貫して避けていたようである。不思議なことであるが、この後の約10年の間も、さらに日本に来てからの滞日3年半の間も、ウイリスがやったような大手術をして、弟子たちを瞠目させた記録は全く残っていないのである。

ヨンケルは当時の麻酔学の世界的権威者であり、外科・産科手術はもちろん戦陣外科でも現場の経験豊富な人であったから、このようなデモンストレーションをして、周囲の日本人医師を仰天させ、名声を博そうと思えば、ウイリス以上に容易にできる腕を持っていたはずなのに、彼の残した京都での記録には全くその痕跡すら発見できない。ソルフェリーノの戦いが、彼の優しい感性の中に、癒しがたい精神的トラウマを残した結果ではないかと想像するほかは

ない。日本滞在中も帰国後もヨンケルが熱中したのは、日本文化のヨーロッパへの紹介であった。帰国してから出版した『瑞穂草』や『日本の御伽ばなし』を見ると、日本文字の活字印刷もない時代に（ということは、明治初期や幕末の、せいぜい木版で刷られた草書ないしは行書体の出版物や語り言葉の聞き取りや会話の中から）これらのドイツ語による著作物を完成させたヨンケルの言語能力には、只々、敬意で頭が下がるのみである。

ヨンケルが日本滞在中にパートナーとして働いた人物が、もし彼の深い文化性を理解できる（例えば）フェノローサに対する岡倉天心のような文化人であったとしたら、150年前の本学に集った英才たちの評価は、いかに素晴らしいものであったかが生き生きと伝えられたであろうに、と悔やまれてならないのである。

-
- 1) 奥沢康正:『京のお雇い医師ヨンケルの「扶桑茶話」』。『外国人のみたお伽ばなし』。2冊とも思文閣から出版(1993年)されている。これまでは、ヨンケルが、どんな人物であったか、誤解に満ちた伝説が広まっていたが、この2冊の書物は、直接にヨンケルの人となりに触れる機会を与えてくれるほか、ヨンケルに対する考え方を一変させるに足る客観的資料も提供してくれる好著である。
 - 2) Junker, F.E.: Description of a new apparatus for administrating narcotic vapours. *Medical Times and Gazette*, ii, 590 (Nov. 30, 1867).
 - 3) Junker, F.E.: On a new apparatus for administration of narcotic vapours; and some observations of the variation of pulse and respiration during the anaesthesia from chloromethyl. *Medical Times and Gazette*, i, 171-173 (Febr. 15, 1868).
 - 4) Editorial: The medicine of the future in Japan. *Medical Times and Gazette*, i, 740 (June, 2.1872).
 - 5) 藤田俊夫:「ヨンケル先生の事跡」(下)。古医学月報 18, 5-7 (1975年)。
 - 6) Jean-Henry Dunant: *Un Souvenir de Solferino*. 1862. アンリ・デュナン著:木内利三郎訳:赤十字の誕生『ソルフェリーノの思い出』。白水社。(1959年)。
 - 7) 『京都府立医科大学 80 年史』。京都府立医科大学刊。(1955年)。

1. 歴代学長

京都府立医科大学の 新しい発展を祈念して

井端泰彦

〈2000.4～2006.3〉

1 母校の行事における思い出

京都府立医科大学は1872(明治5)年栗田口青蓮院において療病院として開学し、来年で創立150周年を迎えます。全国屈指の伝統を誇り今日まで医学、医療の現場で活動して参りました。

私は母校の行事にいろいろと参画しておりますが、最も印象に残っておりますのは、式典委員長を務めました大学創立125周年記念式典であります。1997(平成9)年11月2日、国立京都国際会館に於いて華やかに執り行われました。記念講演としましてノーベル物理学賞受賞者であります、当時筑波大学学長江崎玲於奈博士の「物理学者の歩んだ50年の道」と題する記念講演が行われました。式典におきましては栗山欣弥学長からの挨拶、設置者であります荒巻禎一京都府知事、関係省庁であります文部省、厚生省などからの祝辞が述べられました。また、近隣各大学の学長などが出席されました。式典の後祝賀会が行われ、総勢850名の参加者がみられました。

私は今話題になっております日本学術会議第19期会員(医、歯、薬学)を2003(平成15)年7月より2005(平成17)年10月まで務めました。任期中には我が国の在り方、今後の変遷について濃密な議論が行われ、私も在り方委員会の委員としてしばしば東京に足を運びました。



2 公立大学法人化の動きのなかで

この時期、全ての国立大学の法人化が行われ、私立大学は元々法人でありましたので、公立大学についても法人化の取り組みが種々議論されました。その中で2002(平成14)年1月に府立の大学のあり方懇話会が設置されました。公立大学の法人化および、公立法人の定款案が作成されるまでの経緯については、京都工芸繊維大学、京都府立大学と本学から委員が選出され、いろいろの協議が行われましたが、その経緯については高松哲郎教授(現名誉教授)に尽力いただきました。

府立の大学のあり方懇話会は井村裕夫前京都大学総長を座長とし、京都府の産学公から選ばれた13名の委員から成り、京都府立大学井口学長、府立医大学長として私も含まれております。懇話会では府立の大学の基本的なあり方、教育研究のあり方、大学の組織・運営などについて濃密な議論がかわされました。懇話会の議論について両大学で種々検討がなされましたが、両大学が合同し一大学と成るのではなく、それぞれ京都府立大学、京都府立医科大学として存続することが決定いたしました。

3 学長としての信念

私は2001(平成13)年から6年間本学の学長を務めました。学長として考えたことは、アカデミズムを浸透させること、働きがいのある職場にすること、スターを育てること、合理化、機構の改革、進取の気性に富む大学院生、研究者を育てること、京都府と太いパイプを築くことなどです。但し歴史と伝統の上にあぐらをかくようなものでは発展は望めないため、長期展望を視野に入れた現実的な整備を行うなどの改革を進めました。また学長として全責任を負うにせよ、権限については特別なものを除き管理職や委員会に移譲し、出来るだけスリム化し、その分対外的な対応に振り向けることなどを目指しました。

本学は創立150周年を迎え COVID-19(新型コロナウイルス感染症)が広がる中、医学教育、研究、診療をバランス良く展開し、京都府民の方々の健康を守り、新しく発展することを祈念いたします。

京都府立医科大学 150周年記念によせて

山岸久一

〈2006.4～2011.3〉

創立150周年記念誌の発刊にあたり、2008(平成20)年4月1日より京都府公立大学法人化(一法人二大学)する前2年と法人化後の3年間の移行期の学長を経験しましたので、「府立の大学」と「法人化後の大学」での在り方について述べ、誇り高い伝統と150年の歴史を背負い、京都府における知の拠点として、質の高い教育・診療・研究の成果を世界に発信し続けて頂くことを切に祈念致します。



1

京都府公立大学法人が 一法人二大学でスタート

2008(平成20)年4月1日、京都府公立大学法人が一法人二大学(京都府立医科大学と京都府立大学)のかたちでスタートしました。

独立法人化の2年前(2006年4月1日)より京都府立医科大学の学長として就任して以来、頻回に京都府主催の「独立法人化検討委員会」が開催され、京都府立医大・京都府立大学・京都工芸繊維大学の3大学の代表者と京都府の代表者とで、何回もの会議の後に、2008(平成20)年4月1日より京都府公立大学法人が発足致しました。

そこに至る詳細については、京都府立医科大学創立135周年記念誌33頁～35頁の独立行政法人化基本問題検討委員会報告(高松哲郎先生、岩井直躬先生)を参照下さい。

その過程で最も重要な論点は、「一法人一大学(京都府立大学医学部)とするか」「一法人二大学(京都府立医科大学と京都府立大学)とするか」でありました。

京都府立医科大学は、1872(明治5)年以來の歴史と伝統を「名称」で残すべきとの意見が、府

立医大からの代表者全員の強い主張で、一法人二大学とすることで、「京都府立医科大学」の名称が残る運びとなったことは、忘れることのできない想いであります。

当時、全国で一法人二大学の存在は、京都府と静岡県のみでありました。最近になって、国公立大学でも一法人二大学のかたちがとられる様になってきました。このように、それぞれの大学の歴史を残しながら、運営・経営形体を一体化する方向がとられるようになってきたのを見ますと、私たちが10年以上先んじて進んできた感が致します。

2

独立法人化後の運営の要点は 「透明性」と「情報公開」

2008(平成20)年前後には、全国の国公立大学の独立法人化が進みましたので、全国国公立大学学長会議が富士山麓(2011年)、天城山(2012年)で2回に亘って2泊3日の合宿を開催し、各大学の現状報告と問題提起がされ、膝を突き合わせての討論がなされました。沢山の意見交換がなされましたが、結論としては、独立法人化

後の運営で最も大切なことは、「透明性」を維持し、「情報公開」を基本に運営することでありました。全くその通りだと思いますし、150年の歴史においても、京都府立医科大学はその理念で運営されてきたものと信じます。

今後も透明性のある大学運営を、創立200年に向かってすすめて頂きますよう祈念致します。

3

天皇・皇后両陛下が 京都府立医科大学へ行幸啓

2016(平成28)年10月23～27日までの5日間、私が第40回国際外科学会世界総会会長をした際に、京都国際会館で開催された10月24日の開会式に、天皇・皇后両陛下(現 上皇・上皇后陛下)にご参加賜りました。

開会式終了後、海外と日本の学会役員ご夫妻約100人に限定しての懇親会がスワンの間であり、乾杯の後、両陛下が参加者ひとりひとりと会見され、海外から参加した会員は大興奮でした。

また、学会期間中の10月26日10時37分から11時30分まで、京都府立医科大学に行幸啓賜りました。視察所要時間53分で、視覚機能再生外科学の研究室を視察されました。

宮内庁から聞いた話ですが、当時、全国の国公私立大学は273校ありましたが、大学一校を限定して、天皇・皇后両陛下が行幸啓された大学は、京都府立医科大学のみであるとのことでした。京都府立医科大学150年の歴史の中で初めてのご行幸啓で光栄で、記念すべきことであると改めて感謝致します。

結びに、150周年記念事業をすすめて頂いた全ての皆様に心から敬意を表し深謝を申し上げますと共に、京都府立医科大学が今後170年、200年と益々発展することを祈念致します。

150周年を記念して

吉川敏一

〈2011.4～2017.3〉

私が学長に就任した期間は2011(平成23)年4月から2017(平成29)年3月までの6年間です。その間の出来事を回想したいと思います。

1 病院環境の整備

当時は前学長の山岸久一先生のもとで計画されていた病院外来診療棟(第2期)の建築が着々と進む中、臨床の各教室は鴨川べりに仮設置されたプレハブに疎開中でした。学長室もその2階にあり、北側からの仮出入口から通勤をするという不自由さにはありましたが、そこから見る鴨川対岸の桜は見事なもので、景気の良い槌の音に大学の勢いを感じることが出来ました。その仕上げともいうべき役割が私に与えられ、外来棟の整備に取り掛かりました(写真1、2)。

当時は珍しかったのですが、病院内にレストラン、喫茶店、コンビニなどを誘致し、従来からあった郵便局を合わせて、患者さんや病院・大学関係者にとっての利便性を高められるように病院長、事務部長さんらと計画しました。後のことですが、コンビニ、郵便局が一体となった、「手ぶらで入院—手ぶらで退院」というシステムも構築しました。外来正面玄関には和紙作家の堀木エリ子氏に依頼し、バカラとの共同作品の照明器具を寄贈していただきました(写真3)。また、鹿児島大学名誉教授で画伯の納光弘教授に依頼し、月照の東山を描いていただき、現在も病院外来に展示しています。

次に手がけたのは、2012(平成24)年に迎える創立140周年記念事業の一つとしての大学門やその周辺一帯の整備です。山岸前学長にお願いし、シンボルツリーとしてカツラの木を大量に寄贈していただき、それを配置して中央に枝垂桜を植栽しました。桜守りとして有名な佐野藤



右衛門さんに円山公園の枝垂桜の孫にあたる桜の大きい成木を寄贈していただきました(写真4)。最近になって、やっと花見ができるように成長してきました。また、憩いの場所ともなる芝生のキャンパスは、国際的にも有名な建築家の高松伸氏に依頼し、大学門のデザインも含めて無料で設計していただきました。この新大学門は、本学設立当時の大学門のデザインを近代風にアレンジしていただいたもので、11人の学友の寄付によって建築され(写真5)、今や大学の堂々たるシンボルになっています。

この整備にあたってはいくつもの難題がありました。その一つ目が大学門の中に交差点の信号機が設置されていたことであり、交通の障害にならないように移動することが困難でした。市の交通局や警察の考案で対角点に持つことで解決し、現在は構内に信号機はなくなりました。また二つ目は、門から入った正面に銀行のATMがあり、大学の利用者にとって便利であるという理由で移動ができずに残っていました。これは、患者さんの支払いにも便利なようにと病院内に移動させることで解決しました。このおかげで、門から鴨川までの視界を遮る建造物がなくなり景観が良くなったのに加え、本学の氏神である上御霊神社の千年以上も続いている有名な御霊祭の巨大神輿の回転ができる貴重な



写真1 外来棟(西側全景鳥瞰)



写真2 病院玄関のロータリー



写真3 バカラの照明器具



写真4 シンボルツリーである枝垂桜の前で
(左:佐野藤右衛門氏、右:吉川)

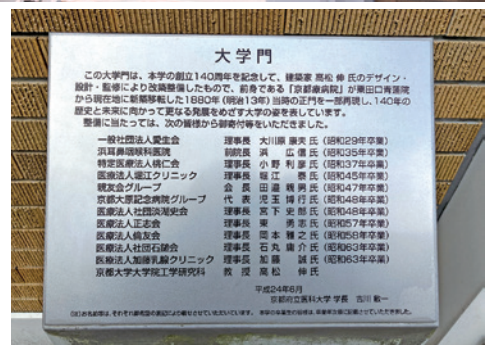


写真5 大学門と寄付者の銘板

場所にもなっています。

外来棟が完成し臨床各科の移動が始まって、プレハブに移転していた事務部門、事務部長・局長室、学長室の移動先がありませんでした。前学長の山岸先生のご尽力によって、耐震構造問題で取り壊しの危機にあった旧図書館が存続し、その3階の教室のみが整備されていました。2階にあった学生のクラブ室を図書館棟に移動し、ここに学長室と事務局長室を、生協が利用していた1階には事務室を整備することになりました。現在は指定文化財である歴史的建造物の旧図書館棟は、ライトアップがなされ、京都の名所の一部として、時々旅行者が写真を撮りに訪れています。

2 新しい施設へのチャレンジ

最も記憶に残る仕事は陽子線センターの設置でした。そこで、この設立に至った経緯について詳しく述べることにします。当時はがんの量子線治療が注目されはじめ、播磨に重粒子線センターが、指宿などに陽子線センターが設立されました。京都にもがんの量子線治療のできる施設が必要との意見が大学内にも持ち上がり、山岸前学長のもとにワーキングチームができ、私も委員として参加しました。重粒子線、陽子線、中性子線などを用いた治療の重要性や必要性は認めるものの、その購入にかかる巨額な費用のことを考慮すると、とてもわが大学内に設置することは難しいとの認識でした。

同じころ、京都大学でも同様の議論がなされており、民間企業から寄付を仰ぎ、京都市の小学校跡地に設立するという京大、京都市、民間企業の共同設立案ができていました。その寄付を集める企業の中に日本電産が含まれていました。

私が学長に就任した時に、真っ先に教育研究評議会のメンバーとして日本電産の永守重信社長に就任をお願いしようと心に決めていましたので、そのお願いに伺ったところ、「京大と比べて京都府立医大では、がんの放射線治療医などの人材が手薄だと聞いたが本当ですか？」と

の質問を受けました。「放射線治療の機器が圧倒的に京大より少なく、そのために治療にかかわる人材も不足がちになっています」と答えたところ、「もしも治療機器がそろえば、人材は集まってきますか？」という意外な質問が返ってきました。私はもちろんですと答えました。

永守社長は陽子線治療センターへの寄付の依頼を京大から受けておられ、その詳細や重要性をご存じでした。それから、陽子線治療機器の寄付をめぐり、京大と本学の争奪戦が始まりました。その詳細は小説にもなりそうな内容ですが、ここでは省きます。永守社長のご厚意のもとに、2017(平成29)年に現在の永守記念最先端がん治療研究センターが竣工しました(写真6)。その中に陽子線治療機器が導入され、放射線治療医などの専門家が多数治療にあたっています。永守社長の放射線治療人材の質問に答えた内容は、いまや実現しています。

さらに、山岸前学長は陽子線以外に、ホウ素中性子補捉療法(BNCT)の重要性にも注目され、定期的な勉強会を開かれていました。私はこれにも参加していたので、学長として陽子線の次に本学にBNCTの導入を図ろうと、寄付を集める計画を立てました。永守社長からロームの社長にお声をかけていただき、BNCTセンターの寄付をロームにお願いすることになりました。陽子線治療とBNCTが同じ敷地内のできる施設は世界でも例がなく、この完成によって、本学のがんの放射線治療は世界のトップクラスの実力を持つものと確信しています。現在、このローム記念BNCTセンターの建物は完成し(写真7)、設置されたBNCT装置は臨床応用



写真6 永守記念最先端がん治療研究センター

を待つのみとなっていますが、課題も残されています。私は、退官後も大阪大学の核物理研究センターや企業との共同で、新世代の画期的な超小型 BNCT 装置の開発をしており、間もなく完成します。この装置をここに並んで導入してもらえればとの夢を抱いています。

予科の名残を残す花園にあった教養教育の校舎が古くなり、その建て替えや移転が必要になっていました。当時の京都府の山田啓二知事によって、北山の京都府立大学構内に京都府立大学と京都工芸繊維大学と本学との三大学共同の教養教育施設を建設することになりました。その建設費の大半を京セラの稲盛会長からの寄付金によって賄い、2014(平成26)年、稲盛記念会館が竣工し、そこに移転しました。

このように京都の財界から、巨額の寄付をいただき、現在の本学の素晴らしい施設が完成しています。京都市民や仏教界からの多額の寄付によって1872(明治5)年に粟田口の青蓮院内に設立された京都療病院は、今や京都府立医科大学と名を変えて150周年を迎えます。現在の大学も、このような多額の寄付によって充実してきたことを考えると、やはり歴史は繰り返されるものと感慨深いものがあります。この恩返しは、本学の全員が京都府民のために医療を通して貢献することだと考えています。

もう一つ、大きな事業が湧き上がってきました。京都北部の京丹後地方の診療拠点として京都府立与謝の海病院が存在し、設立当時から本学が医療面で積極的に関与していました。地方の医師不足などの医療環境の改善を図るため、この病院の本学附属病院化が京都府内で議論さ



写真7 ローム記念BNCTセンター

れ、山田知事から諮問を受けました。わが大学の人材を増やし、臨床・研究の充実を期して、積極的に附属病院化を進めることになり、2013(平成25)年に京都府立医科大学附属北部医療センターと病院名を変え、初代センター長として神経内科の中川正法教授のもとに開設の運びとなりました。現在は北部医療の拠点としてだけでなく、2015(平成27)年には循環器内科の的場聖明教授のもとに京丹後市と共同研究講座「長寿・地域疫学講座」を設置し、弘前大学を中心とした文部省のセンター・オブ・イノベーション(COI)プログラムのサテライト拠点として、長寿の秘訣を探る研究を展開しています。

3 大学改革と広報活動にも注力

視点を移し、大学改革の話をしていきます。当時、臨床研究論文の不正問題が社会問題として取りざたされ、それまで不十分であった倫理委員会を大幅に改善し、外部委員なども含めて、健全な臨床研究審査体制がとれるようにするとともに、臨床研究支援体制を整えるべく研究開発・質管理向上統合センターを設置しました。今は生物統計の専門家を教授に迎え、ここでは臨床研究に関わるすべての問題が解決できるようになっています。

本学を広く知ってもらうための広報活動にも力を注ぎました。広報委員会を立ち上げ、府立医大ニュースを発行し、広く内外に大学のニュースを広めることにしました。ホームページも充実させ、また、最新の医学情報を広く知っていただくためにラジオ番組を始めました。これは堀場製作所の支援のもとに、FM 京都にて大学の先生方による健康番組を毎週放送しているものです。世界中で猛威を振るっている新型コロナウイルス COVID-19に関する最新の情報や、それに対処すべき方法などをいち早く府民の皆様にご伝えることができる意義には大きいものがあります。さらに、月に1回学長による話があり、今も引き続き大学の現状を紹介する良い機会となっています。

退官近くになり病院の不祥事が報道され、体調を崩したこともあり、本学にご迷惑をおかけしました。その内容には不確かな論調が多くあり、私の釈明も述べたいところですが、反省すべきところもあり、ここでは割愛します。

2022(令和4)年4月に大阪市立大学と大阪府立大学が合併し、新たに大阪公立大学が設立され、この医学部の特任教授に就任いたしました。これからも、さらに研究・教育に情熱を注ぐつもりでいます。

現在後任の竹中洋学長のもとに着々と進化し続けている本学の150年の歴史のうちの6年間について、学長として執り行ってきた一部を主に記述しました。200年に向けてのさらなる本学の発展を祈念しています。